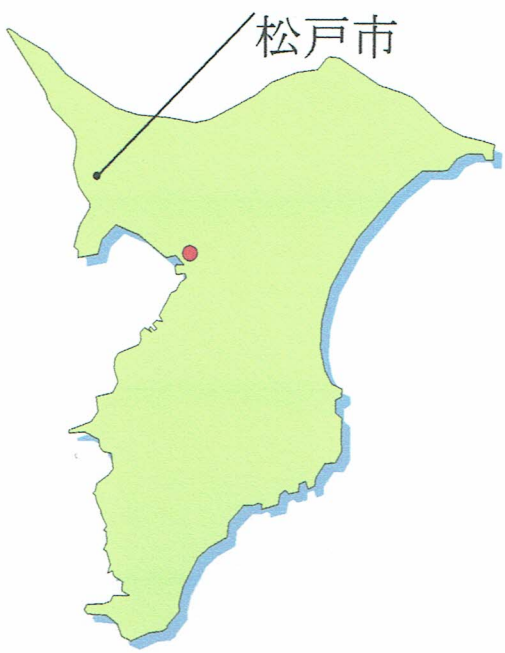
歴史教育者協議会第６２回愛知大会
第２１障がい児教育分科会

「行くぞ、秋田！踊るぞ、ソーラン！なまはげ君とともに！！」
～特別支援学校のわらび座修学旅行～



千葉県立松戸特別支援学校高等部
（千葉県歴教協鎌ヶ谷支部）
関根　千春

１、はじめに

肢体不自由の特別支援学校に勤務して９年、高等部３年を担任することが多く、修学旅行の企画に携わる機会も多くあった。

重度の肢体不自由の児童・生徒が校外に出かけるためには、施設・設備の条件が最優先される。近年は、法律などの整備により、公共の交通機関などはだいぶ整備が進み、移動面では改善されてきたが、まだまだ課題が多いのが現状である。

そのような中で、修学旅行の目的地を選定することには、さまざまな課題が存在する。そのため、出かけることそのことだけが目的で終わってしまうこともある。なかなか出かけること自体が少なかったり、出かけるといっても、自家用車での外出が多い生徒たちにとっては、公共の交通機関を利用するだけでも大きな目標になるといわれるが、私は修学旅行の「修学」、「学び」にこだわりたいと思っている。

そのような思いのもといくつかの修学旅行を企画してきた。大阪ユニーバーサルスタジオジャパンの見学、北海道の小樽運河・余市宇宙博物館の見学、京都の太秦映画村・琵琶湖博物館の見学などである。しかし、どれも「学び」意識して企画したつもりだが、結局、観光旅行とあまり変わらなかったと私自身は反省している。

そんな思いを抱きながらたどり着いたのが、わらび座修学旅行である。今回のわらび座修学旅行では、今まであれこれ試行錯誤してきた修学旅行における「学び」について、私なりに手応えを感じた。そこで、どのように修学旅行に取り組んだのか、改めて振り返ってみたい。

２、学校の様子、生徒の様子

①松戸特別支援学校とは

2009度、開校４０周年を迎えた歴史のある学校で、東葛地域で最初につくられた肢体不自由の特別支援学校（開校当時は養護学校）である。

小学部、中学部、高等部、訪問部に、１５０名ほどの児童、生徒が在籍している。また、寄宿舎があり、１５名ほどの生徒がそれぞれの実態に応じて１～３泊、利用している。寄宿舎については、もともと自宅から通学することが困難な生徒のために設置されたものであったが、現在は東葛地区にいくつかの特別支援学校が開校した（開校当時はいずれも養護学校）ことにより、その役割は変化してきている。

在籍している児童・生徒の多くが車いすを利用していて、移動、食事、排泄など日常生活上の介助や支援が必要である。また、医療的ケア（吸引、経管栄養摂取、導尿補助など、本来医師や看護師など医療従事者に認められていることを、学校内において教員が看護師などの指導のもとに行うこと）の対象児童・生徒が各学年に複数在籍している。

勤務している職員は、教諭、実習助手、養護教諭、看護師、寄宿舎指導員、介助員、スクールバス運転手、栄養士、調理員、給食介助パート、事務職など、多種にわたり、それぞれが生徒にさまざまな場面で接している。職員の総数は、１４０名ほどになる。

②2009年度の高等部３年生

2009年度の高等部３年生は、総勢２２名である。訪問部生２名、通学生が２０名で、それぞれの生徒の様子は次の表の通りである。（以下、生徒名は全て仮名である。）

No.	組	生徒名	性別	様　　子	備考
1	1組	未来子	女	二分脊椎。電動車いす。車いすの自走、ストレッチャーを使用した歩行も可能。身辺自立が確立している。生徒会長。	
2		勇	男	小学校は特別支援学級に在籍。中学部より本校に在籍。独歩。自閉傾向。記憶力がよい。健康管理など見守りが必要であるが、身辺自立がほぼ確立している。	
3		遼	男	中学校まで特別支援学級に在籍。高等部より本校に在籍。車いす自走。身辺自立はほぼ確立している。	
4	2組	明　子	女	車いす、全介助。日常会話をある程度理解。発声や上肢の動きで意思表示する。緊張が強く、こまめな姿勢変換が必要。慣れない場所や人に対しては、特に緊張が強くなる。	
5		裕	男	車いすを使用しているが、手引き歩行や歩行器を使用した歩行（介助が必要）も可能。床面ではよつばいで自由に移動する。問いかけに対して、発声や上肢の動きで答えるこ	

				とがある。	
6		美帆子	女	車いす、全介助。笑顔や泣くことで、快・不快を訴える。時々、発声がある。問いかけに対して、応じていたり、周囲の状況を見分けている様子がある。	
7		夏世子	女	交通事故による中途障がい。高等部２年より本校に編入。車いす、全介助。上肢にまひ。日常会話をほぼ理解しているが、しゃべることがむずかしい。発語器官の機能回復訓練により、発語が増えている。	
8		翔　太	男	車いす、全介助。問いかけに対して、発声や上肢の動きで応えることができるが、正確さに疑問がある。股関節の脱臼により長時間車いすの姿勢でいることがつらい。	
9		千鶴子	女	車いす、全介助。手引き歩行が可、床面ではよつばいで自由に移動。自閉傾向。視力が弱く、聴覚優位。言葉による簡単な指示を理解している様子がある。	
10		龍		車いす、全介助。上肢の動きや発声により、意思表示する。言葉による簡単な指示を理解している様子がある。	
11		真　以	女	車いす、部分介助。歩行器を使用した独歩が可能。日常会話が成立。体験したことや聞いたことを記憶して話す。視野に制限があり、聴覚優位。指先を使った簡単な作業が可能。	
12	３組	賢	男	転居により高等部２年より本校に編入。車いす、全介助。快・不快など表情や上肢の動きで意思表示する。健康面で細かな配慮が必要。	医ケア
13	Ⅳ類	真希子	女	車いす、全介助。床面では寝返りで移動が可。日常会話が成立。文字を読んだり、書いたりはむずかしいが、自分が興味関心のあることを記憶して話す。	
14		愛　子	女	車いす、全介助。発声や上肢の動きで意思表示する。簡単な言葉による指示を理解。慣れない場面、初めての場や人と接する時には極度に緊張する。	
15		果歩子	女	中学校の特別支援学級に在籍後、高等部より本校に在籍。歩行器を使用した独歩やつかまり歩きが可能。言葉による簡単な指示を理解して行動する。身辺自立がほぼ確立。指先を使った細かな作業が可能。	
16		大	男	独歩。食事、排泄など日常生活動作は自立。日常会話が成立し、言葉による指示を理解。ひらがなや簡単な漢字を読んだり、書いたりすることが可。細かな作業も可。健康管理など見守りが必要。	
17		拓	男	車いす、全介助。発声により意思表示がある。運動機能には、かなり制限がある。かすかな腕や指の動きで、スイッチの操作などをする。	医ケア
18		亜　由	女	車いす、全介助。視力が弱く、聴覚優位。歩行器を使用した歩行が可能だが介助が必要。床面で一人で座位を保持。よつばいで自由に移動する。	
19		愛　紀	女	車いす、全介助。後方介助や歩行器を使用しての歩行が可能。発声や表情、腕や上体動かすことにより意思表示する。	
20		莉沙子	女	車いす、全介助。表情や上肢の動きにより意思表示する。運動機能に制限があるが、指や上肢の動きで、スイッチの操作が可能。	
21	訪問	彬	男	麻疹による脳症により障がいを負う。常時、呼吸器が必要。家庭で授業を受けているが、スクーリングで登校したり、行事にはほぼ参加している。	医ケア
22		貴	男	中学部より本校に在籍。免疫不全の病気により通学が困難。学習に遅れはあるが、知的には問題がないとされている。	修学旅行欠席

教育課程上、準ずる課程（教科書を使用した学習を実施）の生徒が１組、知的代替課程、自立

対応課程が混在しているのが２、３組である。国語、数学（ことば・かず）の学習においては、ほぼ、同課題の生徒が学年をこえたグループに分かれて学習したり、作業学習においては、高等部全体を２つの作業班に分けて学習したりするが、学年として同集団で学習したり、活動したりもする。修学旅行は、生活年齢で構成された学年全員を対象に実施される。

３、どのように修学旅行に取り組んだか

①なぜ、わらび座修学旅行なのか

修学旅行において、移動、食事、トイレ、入浴についての施設、設備が整っていることが大きな条件の一つになる。それに加えて、本校の生徒は、重度の肢体不自由の生徒たちなので、長時間、車いす姿勢のままで過ごすことは非常に困難なため、車いすから降りて休憩する場所、スペースが必要である。また、車いす姿勢のままだと、活動が制限されることもある。

今回の目的地である「たざわこ芸術村」は、東京駅から新幹線で３時間半ほどの遠方であるが、角館駅から車で５分ほどの所にある。芸術村に到着すると、村内で、宿泊、食事、入浴、活動が、全て可能である。しかも、いくつかの体験活動を用意し、選択することができる。移動回数が少なく、時間を有効に活用することができる。

また、わらび座の民舞体験は、音楽療法的な手法を取り入れることができ、わらび座側もその旨、準備してくれる。音楽や踊りは、生徒たちの五感に働きかけ、さまざまな実態の生徒たちに対応できる内容である。

②２泊３日の修学旅行の内容

2009年度の修学旅行は、中学部との日程調整から９月２９、３０、１０月１日の２泊３日で実施された。例年、高等部は３学部の中で最後に実施され、１０月の１週目になるが、今回は、紅葉シーズンをはずす形になり、結果的には好都合であった。

３日間の日程は次の通りであるが、車いすを使用している２２名の生徒が一緒に新幹線に乗車することはＪＲ側から断られたので、２グループに分かれて、時間差で出発地（東松戸）～目的地（「たざわこ芸術村」）間を移動した。

時　間	１日目（９月２９日）	２日目（９月３０日）	３日目（１０月１日）
（朝食）		宿舎で	宿舎で
午　前	東松戸駅集合 秋田新幹線で角館へ	ワークショップ（民舞体験） ※ソーラン節	角館駅へ移動 秋田新幹線で東京へ
（昼食）	車中で弁当	村内レストランで	車中で弁当
午後	たざわこ芸術村到着 ※１組は武家屋敷見学 入浴（温泉）	コース別体験学習 ・観劇、クラフト体験 入浴（温泉）	東松戸駅到着、解散
（夕食）	宿舎で	宿舎で	
夜	オカリナコンサート	売店で買い物 各部屋で絵はがきの記入	

※具体的な活動の様子はDVDを参照

③事前学習の取り組み

「修学旅行へ行こう」という大単元を設定し、各教科で修学旅行に関連した学習を展開した。

＜３年生の時間割＞

	月	火	水	木	金
1	自立活動				
2 3	生活単元	グループ	グループ	作業学習	作業学習
	給食・休憩				
4 5	総　合	Ｈ・Ｒ	Ｈ・Ｒ	体　育	芸　術
	帰りの会				

・音楽…テーマソング、ソーラン節の合奏、「輝け君の命」の合唱
・美術…ソーラン節の小道具（魚、大漁旗）制作
・生活単元…アサガオの栽培（手ぬぐいの染料）、手ぬぐいの染色
※手ぬぐいはソーラン節の小道具とわらび座への土産
なまはげ伝説（絵本の読み聞かせ）
ビデオレターの作成
・Ｈ・Ｒ…合い言葉の決定「行くぞ、秋田！踊るぞ、ソーラン！なまはげ君とともに！！」
※作業学習は、染色班、紙すき班に分かれて行われている。それぞれの染色、紙すきも事前・事後学習に取り入れた。

・職員の事前学習…夏休みのはじめに、修学旅行の縮小版を体験する親睦旅行を実施。

修学旅行の事前学習は、実際には２年次からスタートしている。１年前に実施された校外宿泊学習で、修学旅行の事前学習として東京駅の新幹線ホームを見学した。この時点で、生徒たちに１年後新幹線に乗って修学旅行へ行くことが伝えられ、目的についても知らせた。

④事後学習の取り組み
修学旅行のほぼ１週間後に学部で修学旅行報告会が実施され、そこで生徒たちが修学旅行の思い出を一人ずつ語った。併せて、修学旅行中の写真をスライドショーにして上映したり、テーマソングや「輝け君の命」の合唱を発表した。
お世話になった人々やわらび座の俳優（ワークショップを担当したのは３人の俳優）へ、お礼状を作成し、発送した。お礼状には作業学習（紙すき班）ですいた和紙を使用した。
１２月に行われた歌声集会（生徒会主催行事）での学年発表で、「輝け君の命」を合唱した。
後期の大単元「卒業に向けて」においても、修学旅行に関連した卒業制作を取り入れた。大漁旗をついたてにしたり、修学旅行のワークショップを中心に卒業記念のＤＶＤを制作したりした。学部での卒業生を送る会で３年生の発表として「輝け君の命」を合唱するために、音楽の授業で取り組んだ。
卒業式を間近に控えた２月下旬に、偶然であったが、ワークショップを担当したわらび座の俳優絵美ちゃん（川人絵美さん）が学校を訪問してくれた。生徒たちに授業に合流し、修学旅行のテーマソングを一緒に歌った。何の準備もない状態での合唱であったが、生徒たちの口からはすぐに歌詞が流れた。みんな覚えていたのである。絵美ちゃんという具体的な人物との出会い、交流を通して生徒たちが感じたものが「学び」へつながったと思った。

卒業制作のついたて

４、実践を振り返って
次の文章は、修学旅行後に参加した生徒の保護者が書いた手紙である。

今ごろは、たざわこ芸術村の山里も色づき初めているのではないでしょうか。
さて、先日は子供達が大変お世話になり、本当にありがとうございました。お陰さまで、学校生活最後の修学旅行が最高の思い出となりました。大の心に残ったベスト３は、①ワークショップ、②舞子の蔵、③滞在中の美しい夕日です。
送り出す親としては、数日前からホームページで調べ、子供達の様子をイメージしました。正直、これほど交流を持ち、感動し、充実して帰ってくるとは想像していませんでした。
大を含め、障害児は感受性が豊かな子が多いのですが、表現力に欠けます。しかし、帰宅後、皆、それぞれの方法で、一生懸命、伝えてくれました。親にも素敵な思い出となりました。

これからは、たざわこ芸術村の魅力を、他の特別支援学校や施設等に話し伝えます。そして、ひとつ、感じたことは、たざわこ芸術村の自然の美しさが、ホームページからは、あまり伝わってきていない、ということです。夕日の美しさのみならず、山里の景色は、こちらとは別格ですので、もっと、全面に出すべきと思いました。
勝手なことばかり書いて失礼とは存じますが、本心です。今後とも、たざわこ芸術村が発展、進化（？）するようお祈り申し上げます。

学部で実施された修学旅行報告会で、修学旅行中の写真をスライドショウで上映した際に、他学年の担任から、「授業中にこんな笑顔見たことがない」などの声があった。旅行中の写真のみならず、私たち担任も生徒たちの今までにない真剣なまなざしや表情、笑顔をたくさん目にすることができた。

わらび座の修学旅行を振り返って、私は、ともに主体的に取り組める良さを実感している。今回の修学旅行でのメインの活動であるワークショップは、教師、生徒、わらび座のスタッフの三者がともに、主体的にかかわって初めて、楽しさや充実感を体感することができるのである。しかし、そのためには、事前の学習や準備が重要である。特に、本校の生徒達のように多くの支援を必要とする場合は、引率する職員も含めて重要である。
そして、テーマパークや観光地を見学する修学旅行との大きな違いは、具体的な人々との出会い、ふれ合い、交流があることである。今回の修学旅行では、ワークショップを担当してくれたわらび座のばりさん、絵美ちゃん、あきちゃん、オカリナコンサートの松尾さんなどの人々との交流を通して、生徒たちが体感し、学んだことがあったはずである。
以上から、私は、わらび座修学旅行に特別支援学校の生徒たちにとっての学びの可能性を感じている。